

明日へ向けてのアピール (30)

協議会 30 年の歩みを振り返り、明日に向けて新たな一步を 踏み出そう

ろう教育の明日を考える連絡協議会発足から 30 年の節目の大会を、富山湾の幸、立山連峰の幸に恵まれたここ富山において開催することができました。全国から集まった 242 名の参加者が、「手話言語法・条例をろう教育、福祉の発展につなげよう」をテーマに、記録的な暑い熱い学習、討論を行いました。

開会式では富山県知事からのメッセージを、すべて手話を交えて代読いただき、手話言語法・条例の広まりを感じるオープニングとなりました。

パネルディスカッションでは、「今、私たちが望む手話教育のあり方とは」のテーマで討論が行われました。はじめて文部科学省からもパネラーとして参加をいただき、それぞれの立場から忌憚のない意見交換がなされたことは今後につながる一步であったと思います。手話言語を学ぶ機会をどのようにつくっていったらよいのかなど簡単に解決できない課題も出されましたが、それは明日に向けての道標を示してくれることにもなりました。

分科会の「教育現場での授業づくり、コミュニケーションづくりの工夫」では、多様化する子どもたちに対してわかる授業、魅力ある授業のためのさまざまな実践の工夫が報告されました。「早期教育・支援」では、早期支援、教育についての考え方をめぐりさまざまな意見交換がなされました。

「放課後等デイサービスの取り組み」では、学童期だけでなく手話言語を大切にしたい早期からの通じ合えるコミュニケーションの場を作っていこうという熱い思いが語られました。「手話と日本語を自由に使える子どもたちを育てていくために」では、長年のテーマであるこの問題について多くの方が参加し語り合いました。依然として大きな関心のあるテーマですが、まだまだ今後も検討が必要であると感じます。「特別講座：絵本手話語りを学ぼう」では、ワークショップも交えながら絵本を通してコミュニケーションを楽しむことを学びました。

今回の集会で大きく感じたのは、学校教育だけではない地域やろうコミュニティの存在や役割の重要性でした。教職員だけではなく、当事者や手話関係者などさまざまな人が集まる本会の重要性をあらためて認識し、これからも発展させる必要があることを確認する必要があると考えます。

ろう学校の少人数化の危機は待たないであり、教職員の専門性の確保や集団の確保など魅力あるろう学校をどう作っていくかということ、きこえない・きこえにくい子どもたちの生き生きとした学校生活と豊かな未来を提示

するという事は、今すぐに真剣に取り組まなければならないことです。

今回集会開催地富山の 2 つの聴覚総合支援学校（ろう学校）から積極的に参加をしていただいたこと、富山県教育委員会との連携を図れたことは、それぞれの地域で協働してこれらの問題を解決していく上で大きな基盤となります。

ここ富山で語り、学び合った私たちが、それぞれの地域や学校において、当事者を中心としたさまざまな関係者、仲間とともに語り合い、繋がり、そして行動をしていきましょう。

来年の夏は、新しい元号の始まる節目の年でもあります。これからの 30 年を見据えてまた新たな一步を踏み出し、これからの取り組みの成果を持ち寄り、赤城山の麓、上州の地・群馬にて、またお会いしましょう。

2018 年 8 月 26 日

第 30 回ろう教育を考える全国討論集会

in 富山 参加者一同